

吉村 萬壺氏(芥川賞作家)が選んだ 10 冊

資料	コメント
最後の物たちの国で ポール・オースター/著 白水社	既に終わってしまった世界で、行方不明の兄を探す娘の悲惨な旅路が涙を誘うポール・オースターの異色作。
ジョニーは戦場へ行った ドルトン・ランボ/著 角川書店	戦場で四肢も声も失ったジョニーがようやく意思疎通の方法として見出したモールス信号。それを受け取った医師たちの余りに冷たい反応に、人間社会そのものが一種の戦場なのだと衝撃を受ける。
苦海浄土 石牟礼 道子/著 講談社	これは長大な詩である。水俣病との闘いを哀しくも美しく謳い上げた世界文学の名作。
人間臨終図巻 山田 風太郎/著 徳間書店	15 歳で死んだ八百屋お七に始まって 121 歳で死んだ泉重千代まで、人間の死を冷徹に描き尽くした本。読み進むにつれ、人の死も虫と変わらないと分かって死への恐怖が消えていく。
田紳有楽・空気頭 藤枝 静男/著 講談社	「田紳有楽」に大爆笑させられた後、「空気頭」の意味不明さに頭が捻じ切れるぶっ飛び小説。
北條民雄小説随筆書簡集 北條 民雄/著 講談社	ハンセン病で夭折した著者が、たった数年間の内に書き残した炎の如き魂の叫び。恐ろしいほどの情念に打ちのめされる。

吉村 萬壺氏(芥川賞作家)が選んだ10冊

資料	コメント
夏の花・心願の国 原 民喜/著 新潮社	愛妻を病気で亡くした翌年郷里広島で原爆に遭い、46歳で鉄道自殺した作者の作品集。単なる記録文学ではない、現代日本語で書かれた最も美しい文学的成果のひとつ。
夷狄を待ちながら J.M.クッツェー/著 集英社	南アフリカ人のノーベル賞作家クッツェーの作品。両足の捻じれた夷狄（いてき＝野蛮人）の少女に魅入られて墮落していく主人公の一人称の語りは、自他に対して極めて冷徹で一点の有情もない。その語りによって、生身の人間の暴力性が抉り出されて恐ろしい。
私だけの部屋 ヴァージニア・ウルフ/ 著 新潮社	「もしあなた方女性が、小説とか詩とかを書こうと思えば、年五百ポンドのお金と、ドアに鍵のかかる部屋を一つ持つことが必要である」 文学が好きなすべての女性に。
荒野のおおかみ ヘルマン・ヘッセ/著 新潮社	かつてヒッピーたちのバイブルとなった小説。主人公ハリー・ハラーは、魔術劇場でインテリの呪縛から解き放たれ、笑うことを学ぶ。今もなお清新な印象を与える魂の解放の物語。